十日町市博物館　年報

―― 第３号 ――

平成 28 年度

刊行にあたって

当館は昭和54年（1979）の開館以来、「妻有地方の自然と文化」をテーマに掲げ、「雪」と「織物」と「信濃川」を柱に、博物館友の会と車の車輪のごとく協力して活動を続けてきました。その中で、重要文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料2,098点」（昭和61年指定）、同「十日町の積雪期用具3,868点」（平成３年指定）、すばらしい造形美を誇る火焔型土器を含む国宝「新潟県笹山遺跡出土深鉢形土器57点（附871点）」（平成11年指定）を生み出しています。また、展示もこれまでに増築およびリニューアルを行い、三つの常設展示室をもつにいたりました。

現在、当館では平成32年（2020）春のオープンを目指して新博物館建設事業を進めています。平成28年度は基本・実施設計を行い、平成29年度には建築工事に着手します。本書をご高覧いただき、ご指導とご鞭撻いただければ幸いです。

十 日 町 市 博 物 館

目　　次

Ⅰ　館の運営 …… 1
　１．来館者の状況 …… 1
　２．博物館協議会 …… 2
　３．予　算 …… 3
Ⅱ　事業の概要 …… 4
　１．教育普及・展示事業 …… 4
　２．博物館リニューアル事業 …… 8
　３．縄文文化発信事業 …… 10
　４．資料の収集・貸出 …… 11
　５．その他の事業 …… 12
Ⅲ　調査・報告 …… 13
　・特別寄稿「火炎土器と野首遺跡」　寺﨑 裕助（新潟県考古学会会長）…… 13
　・館蔵資料報告①「中里地区の釜神様」　笠井 洋祐（学芸員）…… 16
　・館蔵資料報告②「縮切本帳」　菅 沼　亘（学芸員）…… 17
Ⅳ　博物館友の会 …… 18
附編　これまでに開催された企画展・特別展 …… 19

例　　言

１．本書は、十日町市博物館の平成28年度・事業報告である。
２．特別寄稿として、寺﨑 裕助氏より玉稿を賜った。
３．本書に掲載されている写真の無断掲載(転載)を禁じる。すべての著作権は十日町市博物館と撮影者・提供者に帰属する。
４．本書の編集は菅沼　亘（学芸員）が行った。原稿の執筆は職員で分担し、文末に氏名を明示した。
５．本年度の事業を行うにあたり、関係諸機関および多くの皆様から多大なるご協力をいただいた。個々に名前を記すことはできないが、お礼申し上げる。

（表紙写真：新水・小正月の鳥追い）

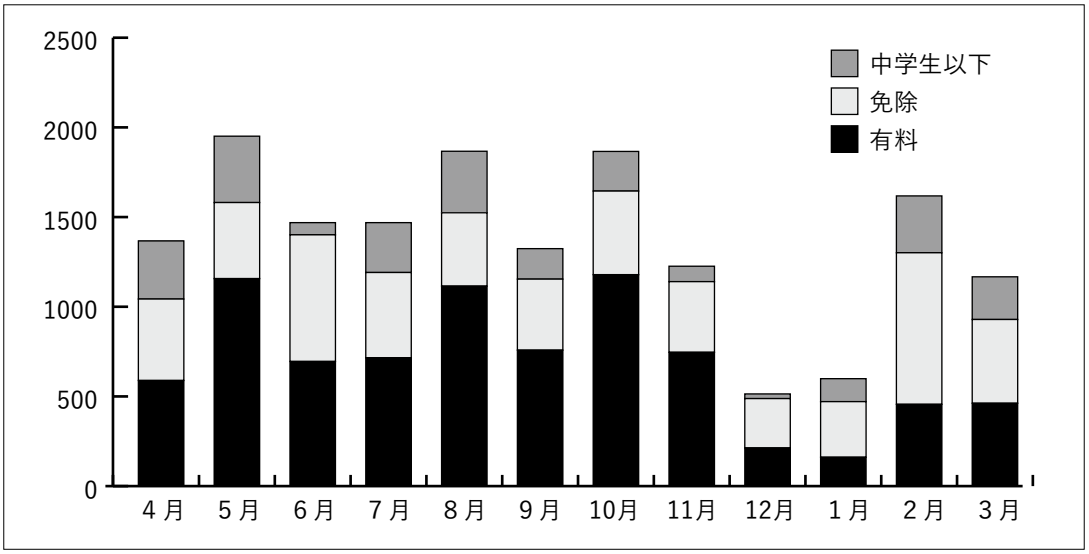
Ⅰ　館の運営

１．来館者の状況

①月別の推移

来館者数の月別推移は、以下のとおりである。中学生以下は無料、高校生以上が有料となっている。

区　分		４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	合 計
一般	有　料	589	1,157	695	716	1,115	758	1,179	746	213	161	456	462	8,247
	免　除	454	424	706	475	409	396	466	394	275	310	845	467	5,621
中学生以下		324	370	68	278	343	170	221	86	26	128	317	238	2,569
合　計		1,367	1,951	1,469	1,469	1,867	1,324	1,866	1,226	514	599	1,618	1,167	16,437



月別来館者数一覧

②団体と視察の受入れ状況

入館料減免申請書や博物館視察・見学・研修依頼書、電話により受け入れた団体について、小学校26校、中学校３校、その他の49団体に分けて以下に示す。　（引間 佳子）

	小　学　校　名
1	十日町市立西小（１・２・３・６年）
2	南魚沼市立五日町小（６年）
3	十日町市立上野小（３・６年）
4	十日町市立鐙島小（６年）
5	十日町市立中条小（３・４・６年）
6	十日町市立十日町小（３・６年）
7	南魚沼市立三用小（６年）
8	柏崎市立北鯖石小（６年）
9	魚沼市立堀之内小（６年）
10	十日町市立松代小（６年）
11	南魚沼市立浦佐小（６年）
12	南魚沼市立薮神小（６年）
13	津南町立津南小（６年）

	小　学　校　名
14	南魚沼市立第二上田小（６年）
15	十日町市立川治小（３年）
16	埼玉県東鷲宮小（６年）
17	十日町市立下条小（２・３年）
18	津南町立芦ヶ崎小（３年）
19	十日町市立田沢小（３年）
20	十日町市立橘小（３・４年）
21	十日町市立飛渡第一小（３・４年）
22	小千谷市立南小（３年）
23	十日町市立馬場小（３・４年）
24	十日町市立倉俣小（３年）
25	十日町市立東小（３年）
26	十日町市立吉田小（３年）

	中　学　校　名
1	十日町市立中条中（１年）
2	十日町市立水沢中（１年）
3	十日町市立川西中（１年）

小・中学校一覧

	団　体　名
1	西保育園
2	まるため
3	ＮＲＣ
4	民家協会
5	街道を歩く会
6	写友会
7	九州国立博物館
8	立正佼成会やわらぎツアー
9	あかいし
10	クロアチアサッカー協会
11	全国川西
12	小樽ライオンズクラブ
13	粋々ツアー
14	魚沼市
15	西会津町
16	郡市小中学校教員研修
17	明治大学博物館友の会

	団　体　名
18	土の会
19	菅井ギター
20	北辰グループ
21	大正大学
22	海外ツアー招聘
23	上市ヶ尾共栄会
24	ディレクトフォース
25	ＪＡうおづ
26	飛騨市
27	神社庁
28	退職教職員
29	水沢保育園
30	食と農の景勝地審査
31	立正佼成会
32	県立図書館ボランティア
33	明高齢者クラブ
34	アフラック

	団　体　名
35	新大ＯＢ
36	天王さくら会
37	浦木長戸クラブ
38	宮澤議員一行
39	長野郷土史の会
40	東御市
41	株式会社　青柳
42	モニターツアー
43	株式会社　三越・伊勢丹旅行
44	広島なぎさ高校
45	中条・やまて交流
46	青山きもの学院
47	上田市城南公民館
48	天理高等学校
49	クラブツーリズム

その他の団体一覧

２．博物館協議会

協議会は年に２回開催され、各回の詳細は以下のとおりである。委員は計10名で、平成25年度よりその一部を公募している。

第１回　平成28年10月21日(水)　13：30 ～ 15：00　委員10名出席

・平成28年度博物館事業の実施状況（中間報告）について

・新博物館建設の進行状況について

第２回　平成29年３月27日(月)　13：30 ～ 14：30　委員５名出席

・平成28年度博物館事業の状況について

・新博物館基本設計について

（南雲 勝巳）

氏　名	職業・所属団体（役職など）	備　考
星　名　信　昭	十日町市博物館友の会会長	委員長、社会教育
市　村　正　史	十日町市文化協会連合会副会長	副委員長、社会教育
小　林　圭　介	十日町市立西小学校校長	学校教育
長谷川　吉　徳	十日町青年会議所副理事長	社会教育
髙　橋　政　子	十日町市教育センター嘱託指導主事	学校教育
阿　部　純　子	十日町市立東小学校ＰＴＡ副会長	家庭教育
徳　永　由　起	十日町市立川治小学校ＰＴＡ副会長	家庭教育
根　津　雅　子	会社役員・いけばな教師	公募
佐　藤　幸　子		公募
阿　部　由美子		公募

博物館協議会委員一覧（任期：平成27年4月1日～平成29年3月31日）

３．予　算

平成28年度の予算は以下のとおりである。一般経費と維持管理経費を除いた博物館事業費の歳出総額（補正後）に占める割合は約90％となっている。　（黒田 朋美）

歳入予算　（単位：千円）

款　項　目				
節	説　明	当初予算額	補正額	補正後予算額
13款　使用料及び手数料	１項　使用料　７目　教育使用料			
５．博物館入館料	５．博物館入館料	1,920	0	1,920
13款　使用料及び手数料	１項　使用料　７目　教育使用料			
５．博物館入館料	10．施設使用者使用料	33	0	33
20款　諸収入	５項　雑入　２目　雑入			
７．教育雑入	１．私用電話料	1	0	1
20款　諸収入	５項　雑入　２目　雑入			
７．教育雑入	２．私用コピー使用料	1	0	1
20款　諸収入	５項　雑入　２目　雑入			
７．教育雑入	３．施設使用者電気料	42	0	42
20款　諸収入	５項　雑入　２目　雑入			
７．教育雑入	70．古文書講座資料代	40	0	40
20款　諸収入	５項　雑入　２目　雑入			
７．教育雑入	98．その他雑入	1	0	1
21款　市債	５項　市債　８目　合併特例事業債			
７．教育債	62．新博物館建設事業	95,000	0	95,000

歳出予算　（単位：千円、千円未満切り上げ）

節		当初予算額	補正額	補正後予算額
１．報　酬	博物館協議会委員	110	0	110
７．賃　金	臨時職員賃金、調査整理補助員賃金	3,024	0	3,024
８．報償費	講師謝礼・指導者謝礼ほか	849	△200	649
９．旅　費	費用弁償・普通旅費	2,497	0	2,497
11．需要費	消耗品費・燃料費・食糧費・印刷製本費・光熱水費・修繕料	10,922	0	10,922
12．役務費	通信運搬費・手数料・保険料	2,734	954	3,688
13．委託料	新博物館基本設計策定業務委託・館維持管理・収蔵物移転整理ほか	120,957	1,869	122,826
14．使用料ほか	テレビ受信料・コピー機リース・収蔵品管理システム利用・自動車レンタル	1,647	△300	1,347
19．負担金ほか	日本博物館協会ほか負担金	46	0	46
	計	142,786	2,323	145,109

事業別歳出予算内訳　（単位：千円、千円未満切り上げ）

事　業　名	当初予算額	補正額	補正後予算額
一般経費	1,565	0	1,565
国宝発信事業	408	0	408
博物館リニューアル事業	119,300	1,669	120,969
博物館施設維持管理（除排雪経費含む）	12,696	0	12,696
教育普及・展示事業	2,437	0	2,437
資料収集・調査研究・資料保存対策事業	688	0	688
縄文文化発信事業	5,692	654	6,346
計	142,786	2,323	145,109

Ⅱ　事業の概要

１．教育普及・展示事業

①教育普及事業

博物館講座

本講座は市民を対象としたもので毎年６月に行われ、平成25年度は「自然」、平成26年度は「石仏」、平成27年度は「火焔型土器」、今年度は「野首遺跡土器の魅力」がテーマである。各回の演題と講師は以下のとおりであり、全３回で計106人の受講者があった（受講料無料）。また、各回の講演会終了後に講師を交えて、土器の見学会を行っている。なお、第2回目講師の寺﨑裕助氏より講演要旨を寄稿していただいた（13頁）。

第１回：６月11日(土)「千曲川流域の土器のお手本―長野県から見た野首遺跡出土土器―」
寺内 隆夫 氏（長野県立歴史博物館 上席学芸員）

第２回：６月18日(土)「火炎土器と野首遺跡」
寺﨑 裕助 氏（新潟県考古学会 会長）

第３回：６月25日(土)「利根川上流域から見た野首遺跡中期土器群」
山口 逸弘 氏（公財・群馬県埋蔵文化財調査事業団 上席専門員）

古文書入門講座

本講座は古文書解読の初心者を対象としたもので、市内の史料をテキストにして古文書に親しむと共に、郷土の歴史を学ぶことを目的としている。昨年度に続き、講師は林　悦郎氏（博物館友の会・古文書研究グループ）にお願いした。今年度は行事帳、御用縮諸記、五人組仕置帳などをテキストとしている。講座は６～３月の土曜日（隔週・午前）に行われ、回数は全17回である。今年度の受講生は計16人、内２人が新規の申し込み、その他は昨年度からの継続であった。また、受講生よりテキスト代（2,500円）を徴収している。

子ども博物館

本事業は、市内の小学４～６年生を対象とした体験教室である。今年度は以下のとおり、縄文体験を全３回実施した。各回とも定員10名(事前申込)、参加費(材料費)を徴収し、保護者(参加費不要)も参加可能としている。勾玉づくりでは、弓錐による穴あけ体験も合わせて行った。土器づくりではオーブン陶土を使用し、制作された土器を秋季特別展「土器づくりの考古学」で展示している。

・８月６日(土)　勾玉づくり（参加者：13人）
・10月８日(土)　土器づくり（参加者：７人）
・12月10日(土)　縄文土器キャンドルづくり（参加者：５人）

勾玉づくり

土器づくり

縄文土器キャンドルづくり

②展示事業

夏季企画展「館蔵資料展　市民からの贈り物」

企画展のチラシ・ポスター

本展では、普段は収蔵庫に保管され公開される機会の少ない寄贈資料の一部を展示して、博物館における資料収集活動の一端を紹介した。博物館友の会と共催で開催され、会期は７月30日(土)～８月28日(日)の29日間、観覧者数は計1,934人である。

展示構成は、①古書籍類、②着物資料、③資料いろいろ、④こんなものまで博物館資料である。①では江戸時代の終わりから昭和の初めにかけて出版された写本・復刻版、教科書を紹介している。②は、越後縮や明石ちぢみ、マジョリカお召しなど、着物産地十日町の基礎を築いた着物を展示した。また、平成26年に寄贈された藕糸織（額装）を特別公開している。③では、掛軸や屏風、陶磁器などの書画・骨董、古文書、民具から化石までバラエティーに富んだ資料を紹介した。④は、電化製品を中心に昭和の資料を展示している。7月30日(土)午後には、長島時子氏（恵泉女学園短期大学名誉教授）を招いて、記念講演会「二千年ハスの発掘秘話並びに藕糸織」を開催し、35人の聴講者が参集した。

企画展会場

秋季特別展「土器づくりの考古学」

特別展のチラシ・ポスター

本展は、博物館友の会と信濃川火焔街道連携協議会との共催で開催された。会期は10月１日(土)～11月６日(日)の37日間、観覧者数は計2,274人である。

平成８年に発掘調査された野首遺跡（縄文時代中・後期）では、大量の土器が出土し、土器に付けられた様々な装飾（把手）が見られる。本展では、新潟県内の遺跡から出土した縄文土器の製作に関わる遺物を集めると共に、県内および周辺各地で活動している土器作りの会の方々が制作した土器とモデルとなった実物の土器を展示して、土器づくりの魅力を紹介した。展示構成は、①粘土と器の成形、②文様と装飾、③縄文人の技に迫るである。①は、県内で出土している焼成粘土塊や輪積み痕を残す土器などを展示して、土器づくりについて解説した。②では野首遺跡から出土した火焔型土器の鶏頭冠突起など、立体的な装飾突起の破片を展示している。③は、井出政男氏（ギャラリー風画)、長岡市土器造り同好会、岩宿博物館友の会・土器作りサークル、茅野市尖石縄文考古館・土器サークルの方々が制作した土器と、これらのモデルとなった土器を展示した。

特別展会場

制作された土器

井出政男氏ギャラリートーク

また、10月15日(土)午後には井出政男氏を招いて、記念講演会「縄文土器の造形と粘土について」を開催し、43人の聴講者が参集した。また、パンフレット（Ａ３・二つ折り）を無料配布、記念講演会の要旨を収録した図録をミュージアムショップで有料頒布している。

ロビー特設展示

本展示はロビー壁面ガラスケースの有効活用とリピータの増加を図り、館蔵資料などを定期的に入れ替えて展示するものである。今年度は以下のとおり、４回実施した。

・４～６月　　新十日町市指定文化財「樽沢開田遺跡出土品」
・７～９月　　昭和の映画ポスター
・10～12月　　縄文の写真家・小川忠博氏写真パネル
・１～３月　　博物館に寄贈された昔の道具

樽沢開田遺跡出土品

昭和の映画ポスター

寄贈された昔の道具

移　動　展

10月30日(日)に上新田自治会館において､「野首遺跡出土品展」(上新田文化祭と共催）を実施した。野首遺跡は上新田地内に所在する遺跡であり、平成８年に十日町市教育委員会により発掘調査が行われ、縄文時代中・後期の集落跡が発見されている。土器捨て場から火焔型土器を含む縄文時代中期の土器が大量に出土した。なお、出土品1,431点が、平成28年度に市指定文化財に指定されている。

野首遺跡出土品展

貸　　館

十日町市書道協会が、特別展示室を使用して書道協会展を開催している。会期は６月３日(金)～５日(日)の３日間、観覧者数は167人（観覧無料）であった。なお、同展の後援が十日町市教育委員会であったため、会場使用料を免除している。　　（菅沼　亘）

③博学連携プロジェクト

現代の私たちは歴史的に作られてきた文化と自然とあいだでどのようにふるまい、生きていくべきなのだろうか。小学校６年生児童の総合学習で、その根源を縄文文化から学びとってもらう活動を行っている。参加校は信濃川流域にある長岡市（関原小学校)、小千谷市（吉谷小学校)､十日町市（中条･鐙島･下条小学校)､津南町（津南小学校）の６年生である。博物館では下記の学習を実践した。

子ども縄文研究展2016

・平成28年７月４日　　学習交流会　　会場：十日町市博物館・十日町市総合体育館
・平成28年９月30日　　土器作り（成形）　会場：鐙島小学校教室
・平成28年11月８日　　土器作り（焼成）　会場：笹山遺跡広場・笹山縄文館
・平成29年11月28日　　縄文子どもフォーラム2016　会場：新潟県立歴史博物館
・平成29年1月14日～２月19日　　巡回展「子ども縄文研究展2016」　会場：十日町市博物館

なお、この活動は下記の組織で行っている。

主催：火焔街道博学連携プロジェクト・火焔街道博学連携推進研究会
共催：津南町農と縄文の体験実習館なじょもん・十日町市博物館・新潟県立歴史博物館
後援：信濃川火焔街道連携協議会

④まちの文化歴史コーナー

十日町市市民交流センター（愛称：分じろう）1階の「まちの文化歴史コーナー」において、博物館収蔵資料の展示を開始した。今年度は以下の日程で収蔵資料を展示した。　（阿部　敬）

・平成28年４月下旬～６月３日(日)　　国宝No.1（レプリカ）・解説パネル
・平成28年６月４日(土)・５日(日)　　国宝No.5（実物）・解説パネル
・平成28年６月６日(月)～７月１日(金)　　越能山都登・解説パネル
・平成28年７月２日(土)～10月３日(月)　　長徳寺板碑・解説パネル
・平成28年10月５日(水)～11月７日(月)　　栃倉式土器・解説パネル
・平成28年11月９日(水)～翌２月13日(月)　　中島遺跡出土品その１・解説パネル
・平成29年２月15日(水)～４月５日(月)　　中島遺跡出土品その２・解説パネル

まちの文化歴史コーナー（分じろう）

国宝No.1レプリカ

越能山都登

⑤そ　の　他

博物館実習

８月４日(木)～８月10日(水)まで実習生を受け入れた。受入れ大学と人数は、昭和女子大学人間文化学部１人、鶴見大学文学部１人、東海大学文学部１人の計３人である。実習では民俗・考古資料の整理、教育普及活動の補助、受付業務、市内博物館関連施設の見学などを行っている。

職場体験

中学１・２年生の職場体験を受け入れた。受入れ中学校・人数と期間は、津南中学校２年生１人(７月13・14日)、中条中学校１年生１人(８月５日)、同２年生２人・十日町中学校２年生１人(８月５・８日)の計５人である。体験では考古資料の整理、受付業務、市内博物館関連施設の見学などを行った。

博物館実習

職場体験

２．博物館リニューアル事業

①新博物館基本設計業務委託プロポーザル

館では、平成27年度に「新十日町市博物館基本計画書」を策定した。これに引き続き本年度は、基本設計業務を業者に委託している。業者の選定にあたっては、公募型プロポーザル方式を採用した。応募資格と実施スケジュール、審査の概要などは以下のとおりである。

応募資格（主なもの）

・十日町市以外の国内に本店を置く建築設計事務所及び展示設計事務所、十日町市内に本店を置く建築設計事務所の３社により構成される設計共同体であること。

・十日町市以外の国内に本店を置く建築設計事務所及び展示設計事務所については、平成13年４月１日以降に竣工した博物館もしくは美術館の基本設計又は実施設計の実績（国内に限る）を有すること。

・十日町市内に本店を置く建築設計事務所については、平成13年４月１日以降に竣工した同市内の公共施設の基本設計又は実施設計の実績を有すること。

実施スケジュール

・実施要領の公表　　平成28年５月13日(金)
・参加表明書等の提出期限　　平成28年５月31日(火)
・１次審査　　平成28年６月１日(水)～７日(火)
・技術提案書等の提出期限　　平成28年６月28日(火)
・２次審査　　平成28年７月６日(水)
・選定結果の通知　　平成28年７月11日(月)

技術提案書の課題

技術提案の課題は以下のとおりとし、その提案内容は基本計画書を踏まえたものとした。

課題１：十日町市の気候と風土、周囲の施設や景観との調和、収蔵資料の適切な保存環境、ランニングコストの縮減を考慮した建物と設備について提案してください。

課題２：基本計画書に示された７つの機能を果たすことが可能で、また、来館者導線、職員・関係者導線、資料搬入導線が極力交差しないよう考慮した諸室配置について提案してください。

課題３：導入展示「地域の歴史と文化」のレイアウトと展示手法について提案してください。

課題４：常設展示Ⅰ「縄文時代と火焔型土器のクニ」のレイアウトと展示手法について提案してください。

課題５：常設展示Ⅱ「織物の歴史」のレイアウトと展示手法について提案してください。

課題６：常設展示Ⅲ「雪と信濃川」のレイアウトと展示手法について提案してください。

審査の概要

１次と２次の２段階審査とした。１次審査では、業務実績や実施体制など応募者より提出された書類の審査を担当事務局が行っている。２次審査は、「新十日町市博物館基本設計プロポーザル審査委員会」を設置して、応募者より提出された技術提案書のプレゼンテーションとヒアリングを実施した。審査委員会の委員構成は以下のとおりである。また、プレゼンテーションは公開とし、平成28年７月６日(水)の午後に十日町情報館において開催され、30人の参集者があった。終了後に審査委員会（非公開）が行われ、石本・トータルメディア・阿部設計共同体が第１位交渉権者に選定されている。

公開プレゼンテーション

審査委員会の委員構成

内部委員（◎ 委員長）

◎副市長、教育長、建設部長、文化スポーツ部長、博物館長

外部委員（○ 副委員長）

○青 木　豊（基本計画検討委員会 委員長／國學院大學文学部 教授）

池田 哲夫（基本計画検討委員会 副委員長／新潟大学 名誉教授）

池田 史子（基本計画検討委員会 委員／山ノ家 主宰）

竹内 俊道（十日町市文化財保護審議会 委員）

小川 忠博（写真家）

審査委員会（非公開）

②新博物館基本・実施設計

基本計画書に示されているとおり、新しい博物館は平成32年（2020）春の開館予定で、国指定文化財の公開･展示･収蔵ができるよう文化庁が定めた「文化財公開施設の計画に関する指針」（平成７年･文化庁文化財保護部）に沿った施設（ふた夏の枯らし期間が必要）である。これを実現するためには平成29年の夏に建設工事を着手し、平成30年夏までには躯体を完成させる必要がある。このため、建築および展示の基本と実施設計を平成28年度に完了させる計画とした。

また、上述したとおり、建築と展示設計事務所が設計共同体を組むことにより、両者間の調整に要する館側の負担を少なくすると同時に、調整が遅滞なく進むようにした。さらに、冬季間における各種の積雪対策を考慮して、共同体に市内の建築設計業者を加えている。基本および実施設計業務委託とも上記の設計共同体と随意契約を結んだ。基本設計の委託期間は、平成28年７月29日～10月31日、実施設計は平成28年11月１日～平成29年６月30日である。

８月上旬より建築と展示設計の合同部会を隔週で、この合間には展示設計の分科会を同じく隔週で行った。また、建築設計を進めるにあたり、教育総務課主任技師より協力を得ている。そして、文化庁文化財部美術学芸課（３回)、独立行政法人国立文化財機構・東京文化財研究所（１回）より指導を受けた。建物の概要は以下のとおりである。　（菅沼　亘）

・規　　模　　地上２階
・構　　造　　鉄筋コンクリート／一部鉄骨造
・延床面積　　約3,111㎡

諸室機能	諸室名（仮）	階数	面積(㎡)	計
展　示	導入展示室	1	145	979
	常設展示室１「縄文時代」	1	212	
	常設展示室２「織物の歴史」	1	211	
	常設展示室３「雪と信濃川」	1	212	
	企画展示室	1	136	
	展示室前室	1	33	
	準備室	1	30	
交　流	エントランスホール（風除室含む）	1	180	299
	ミュージアムショップ	1	14	
	講　堂	1	68	
	体験室	1	37	
収集･保存	考古資料収蔵庫	2	131	712
	民俗資料収蔵庫	2	456	
	着物資料収蔵庫	2	73	
	借用資料収蔵庫	2	15	
	収蔵庫前室	2	28	
	資料一時保管室	1	9	
調査･研究	研究室	2	46	120
	資料整理室	2	22	
	図書資料室	2	52	

諸室機能	諸室名（仮）	階数	面積(㎡)	計
管理･運営	受　付	1	8	159
	事務室	1	67	
	給湯室	1	6	
	応接室	1	12	
	ボランティア室	1	11	
	友の会室	2	22	
	会議室	2	33	
供用ほか	休憩室	2	23	440
	ロッカー（職員用）	1	10	
	トイレ（職員用）	1・2	16	
	トイレ（入館者用）	1	53	
	倉　庫	1・2	37	
	荷解き室	1	38	
	トラックヤード	1	66	
	エレベーター（資料用）	1・2	32	
	階段・廊下	1・2	165	
機械室ほか	機械室	1・2	347	402
	その他	1・2	55	
合　計			3,111	

新博物館の諸室面積表（基本設計段階の概算）

３．縄文文化発信事業

本事業では、平成25年度より開始した「2020年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に火焔型土器を」の要望活動と合わせて、このオリンピックを契機に「縄文文化の素晴らしさ」を世界に向けて発信する活動を行っている。

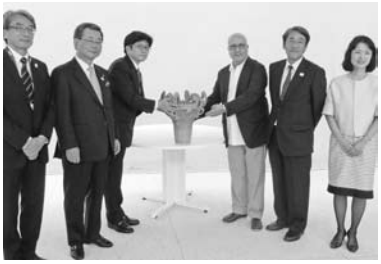
①リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック2016での「国宝・火焔型土器レプリカ」寄贈

リオデジャネイロオリンピック･パラリンピックにおいて、東京オリンピック組織委員会と外務省、内閣府、スポーツ庁、文化庁、東京都などの共同で2020東京オリンピックをＰＲするために、「Tokyo 2020 JAPAN HOUSE」が開設された。会場はリオデジャネイロ市のバーラ地区にある複合文化施設「Cidade das Artes（シダージ・ダス・アルテス 芸術の街)」の１階、期間は2016年８月５日～９月18日である。

この中の「文化庁エリア」において、十日町市笹山遺跡出土の国宝・火焔型土器レプリカ（指定番号１）が展示されることになった。当市と文化庁で日本語の解説文を作成し、これを当市の国際交流員が英訳、さらに日伯文化交流協会の協力でポルトガル語に翻訳した。展示パネルと展示ケースは文化庁が準備し、当市はレプリカをブラジルまで輸送している。ブラジルへのレプリカの輸送は関税審査の手続きが複雑で、日数を要する大変な作業となった。７月６日に当市からフランス・パリ経由でリオデジャネイロに空輸し、７月末に無事リオに到着、開会式前の８月３日に展示が完了している。

レプリカ展示の様子

展示終了後のレプリカの扱いについて文化庁および外務省と協議した結果、JAPAN HOUSEが開設されたCidade das Artesの館長に当市から寄贈することが決定した。寄贈式出席のため、９月15日に当館の佐野が十日町市を出発し、アメリカ・アトランタ経由で片道30時間以上をかけてリオデジャネイロに到着した。９月17日には、日本側から水落敏栄文部科学副大臣、梅田在ブラジル全権大使、リオデジャネイロ総領事ほか外務省職員立会のもと、Emilio Kalil館長（Fundacao Cidade das Artes財団 理事長）にレプリカが寄贈された。JAPAN HOUSEの終了後は、Cidage das Ariesの２階エントランスに日本とブラジルの交流の証として展示されている。



レプリカの寄贈式

②国宝・笹山遺跡深鉢形土器の３次元計測

東京国立博物館と当館の共同研究で、国宝・笹山遺跡深鉢形土器の非接触方式による３次元計測とＸ線CT計測を東京国立博物館において実施した。３次元計測は、３Ｄスキャナを用いて対象物に直接触れることなく、その形状や色彩を３次元デジタルデータとして取得・計測する方法で、また、Ｘ線CT計測は病院のCT 検査と同様に物体の断層を測定することで、目に見えない内部の状況を調査する方法である。期間は搬入と搬出作業を含め平成28年12月11 ～ 17日の１週間、測定作業は東京国立博物館研究員により行われ、当館の菅沼学芸員が立ち会った。今回は、国宝・火焔型土器No.1と王冠型土器No.15の2点が計測され、そのデータ量はNo.1で17GB、No.15では2GBに及ぶ。今回の共同研究の成果が、様々な分野で活用されることを期待している。

計測作業の様子（東京国立博物館）

（佐野 誠市）

４．資料の収集・貸出

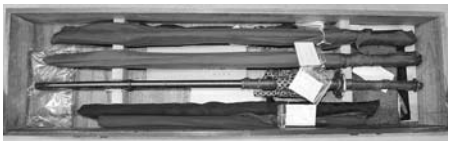
①資料の寄贈

博物館では、市民から資料の寄贈を受けている。館内および館外収蔵庫の収容量が限られているため、受け入れの可否については、同種の資料が既に一定の点数収蔵されていないか、展示および貸出（使用）に耐えうる保存状況か、おおよその製作・使用年代がわかっているかなどを判断基準としている。今年度は、以下のとおり29件の寄贈を受けた（受付番号14965 ～ 14993・平成29年2月28日現在）。

14965（農具ほか）、14966（昔の紙幣）、14967（昔のカメラ）、14968（足踏みミシンほか）、14969（ユキノコギリ）、14970（和紙の鯉のぼり）、14971（出征旗）、14972（ケシツボほか）、14973（着物）、14974（桶屋道具）、14975（頼母子講資料）、14976（昔の電気コタツ）、14977（日本刀ほか）、14978（箪笥）、14979（スクリーン型枠）、14980（掛軸）、14981（スゲボシ）、14982（尋常小学校唱歌テープ）、14983（着物）、14984（着物）、14985（旗）、14986（ガス炊飯器）、14987（シュロボシほか）、14988（屏風）、14989（古文書）、14990（明石ちぢみサンプル帳）、14991（茅葺民家写真）、14992（写真アルバムほか）、14993（古文書）

鯉のぼり

桶屋道具



日本刀

尋常小学校唱歌テープ

スクリーン型枠

②実物資料の貸出

資料の貸出状況は以下のとおり、考古資料７件（レプリカ含む）、民俗資料１件の計８件である。この他に、ワラグツ・スゲボシなど民俗資料複製品の貸出もあった。　（菅沼　亘）

貸　出　先	資　料　名（点数）	目　　的（展覧会名・会期など）
史跡古津八幡山・弥生の丘展示館	牛ヶ首遺跡土器ほか20点／城之古遺跡土製紡錘車ほか32点／柳木田遺跡管玉ほか28点　計80点	企画展「邪馬台国の時代３　古津八幡山の頃の信濃川右岸の世界」（7/12～9/25）
長岡市馬高縄文館	野首遺跡火焔型・王冠型土器　計２点	夏季特別展「火炎土器展」（7/16～9/4）
津南町農と縄文の体験実習館なじょもん	荒屋遺跡採集品（寄託）　計24点	秋季企画展「氷河期を生きた狩猟・採集民の世界」（9/3～11/13）
愛知県陶磁美術館	国宝・笹山遺跡火焔型土器（No.２・５）２点／野首遺跡王冠型土器１点　計３点	特別企画展「人が大地と出会うとき」（9/10～10/23）
國學院大學博物館	国宝・笹山遺跡火焔型土器（No.６）・三角形土版・三角とう形土製品16点／笹山遺跡深鉢形土器１点／森上遺跡火焔型・王冠型土器２点／幅上遺跡王冠型土器１点／南雲遺跡大珠３点／ぼんのう遺跡石棒・三角とう形土製品２点／小坂遺跡三角形土版・三角とう形土製品11点／カウカ平遺跡土偶２点／大井久保遺跡土偶1点　計39点	特別展「ジョーモネスクジャパン2016火焔型土器のデザインと機能」（12/10～2/5）　主催：國學院大學博物館・信濃川火焔街道連携協議会
新潟県立歴史博物館	アンギン関連資料（重文・寄託品含む）　計41点／越後アンギン伝承会制作作品	冬季企画展「すてきな布―アンギン研究100年―」（1/21～3/20）　主催：新潟県立歴史博物館・十日町市博物館・津南町教育委員会
北海道環境生活部文化スポーツ局文化振興課 世界遺産推進室	国宝・笹山遺跡火焔型土器（No.１）レプリカ　１点	「縄文雪まつり―JOMON SNOW FESTIVAL―」（2/6～12）
三条市生涯学習課	国宝・笹山遺跡火焔型土器（No.１）レプリカ　１点	さんじょう遺跡物語展示会「遺跡発掘調査速報展2017＋日本遺産 なんだ、コレは！」（2/17～3/26）

実物資料の貸出一覧

③写真資料の貸出

写真資料の貸出件数は計156件、主な貸出状況は以下のとおりである。例年どおり、国宝・笹山遺跡火焔型土器をはじめとする考古資料が９割以上を占めている。その他には、越後アンギン、館内ジオラマ「縄文ムラのくらし」などがある。使用目的では、教科書、テスト、問題集など教育関係に加えて、美術資料としての使用も増えている。（中山 未沙樹）

貸　出　先	出　版　物	貸 出 資 料	備　考
東京法令出版株式会社	『ポイント整理日本史』	国宝・笹山遺跡　火焔型土器	高校問題集
㈲アート・エフ	『2017センター試験実戦問題集 日本史Ｂ』		
株式会社ユニフォトプレスインターナショナル	『標準新演習社会中2 夏季テスト』		中学問題集
栃木県連合教育会	『夏休みの友・６年』		小学校問題集
阿部出版株式会社	外舘和子著『日本近現代陶芸史』		
㈱小学館クリエイティブ	『はじめて出会う日本美術』		
株式会社 誠文堂新光社	『新しい　縄文の教科書』		
株式会社エディット	『ノジュール』』10月号		
ＮＨＫ	NHK総合テレビ「土曜スタジオパーク」		ＴＶ番組
株式会社便利堂	『国宝辞典』第四版		
株式会社グレイル	別冊宝島『万葉集とは何か』	館内展示「栗ノ木田遺跡の配石墓」	
株式会社悠工房	『しあげパワーアップ　６年』	笹山遺跡出土 石鏃	小学校問題集
株式会社ベストセラーズ	『歴史人』４月号	青　苧	
ハースト婦人画報社	『美しいキモノ』2016年冬号	越後縮の紡織用具及び 関連資料	
株式会社秀学社	『新しい国語のワーク　２年』	「無官大夫敦盛」・「維盛哀別」（児玉輝彦画）	

写真資料の貸出一覧（主要なもの）

５．その他の事業

①資料保存対策事業

当館所蔵の「藕糸織」は、平成28年３月に保存・活用のため密閉型の額装にされた。額装に協力いただいた文化創造巧芸の和高智美氏、国立民族学博物館の日高信吾准教授らにより、その後の額内と環境（収蔵庫）の温湿度モニタリングが行われた。その結果の解析及び保存方法の有効性について、平成29年7月の文化財保存学会全国大会で発表される予定である。（村山　歩）

②雪文化３館提携事業

３館相互の入館者増加と３館提携事業を広く周知するため､雪文化３館スタンプラリー（割引券付）および雪文化３館パンフレットを観光施設に配布した。スタンプラリーについては、３館すべての押印が終了した来館者に記念品を贈呈している。平成28年度のスタンプラリー利用者数は（平成29年３月９日現在)、230人であった。（大滝 孝子）

③国宝発信事業

博物館ウェブページ作成委託、看板借地を行った。博物館専用のウェブページの更新は、展示・講演・イベントに関する情報を随時掲載し、また恒常的な閲覧を促して博物館および文化財課事業への興味関心を惹起する目的で、「じっぱくブログ」（博物館事業の職員コラム）と笹山日記（笹山遺跡関連事業の職員コラム）を随時更新している。このブログを含む関連事業については、文化庁の広報から依頼により、文化庁ウェブ広報誌「ぶんかる」内の「いきいきミュージアム」(No.19）に記事を投稿した。一部固定ページについては英語表記を実施し（平成29年２月15日～)、インバウンド対応への取り組みを開始した。（阿部　敬）

Ⅲ　調査・報告

特別寄稿

火炎土器と野首遺跡

新潟県考古学会会長　寺 崎 裕 助

はじめに

火炎土器[註1・2]は、「重要文化財」・「国宝」・「大英博物館での展示」・「東京オリンピック・パラリンピックの聖火台への運動」・「日本遺産」というように、今や縄文土器の枠を越えて日本文化を代表する文物のひとつになりつつある。しかし、その編年・分布・用途などの本格的な研究は1980年前後からである。今語られている火炎土器の各論は、それ以降の研究成果に負うところが大きい。今回は、それらの研究成果を踏まえながら火炎土器研究の現状と野首遺跡の土器について触れてみたい。

Ⅰ．煩雑な名称

名称は、頭に「カエン」あるいは「オウカン」が付くものだけでも、「火焔土器」・「火焔型土器」・「王冠形土器」・「王冠型土器」・「火炎土器様式」・「火炎系土器」などがあり煩雑である。主要な各名称の概要は以下のとおりである。

火焔土器：1936年（昭和11）ころ長岡市馬高遺跡から、近藤篤三郎（こんどうとくさぶろう）によって発掘された１個の土器に付けられた愛称である。

火焔型土器：火焔土器と近似する器形・文様・突起を持つ土器で、鶏頭冠突起や鋸歯状突起と呼ばれている突起が特徴である。

王冠形土器：馬高遺跡から発掘され、形が王冠に似ている１個の土器に付けられた愛称で、短冊形突起と呼ばれている突起の上部、向かって左側に抉りが入るのが特徴である。

王冠型土器：王冠形土器に類似する器形・文様・突起を持つ土器で、四つの大きな山形の突起が特徴である。

火炎土器様式：火焔型土器や王冠型土器、および一緒に出土すると考えられている地元独特の土器や東北南部系の土器、あるいは縄文のみが施される土器などの総称である。

火炎系土器：福島県、栃木県、群馬県など新潟県を中心とする火炎土器圏の周辺地域に分布し、火焔型土器や王冠型土器に突起・器形・文様の一部が類似するが、火炎土器とは一線を画する。

Ⅱ．問題点

火炎土器はここ10年余資料が増加し、火焔型土器や王冠型土器の他にも、他の類型の存在が目立ってきた。また、王冠型土器は、中期前葉からの系譜を引く新潟本来の土器と考えられるが、火焔型土器に比べて研究が遅れているという感が否めない。その要因のひとつとして概念の曖昧さが指摘でき、その再考と再分類が必要と考えられる。深鉢を中心とした火炎土器の基本的な特徴あげてみると以下のようになる。

①器形はキャリパー形を呈し、文様帯は口頸部と胴部というように大きく二分される。

②文様構成は、原則頸部と胴部上位は垂下渦巻文や横方向の渦巻文、胴部下位は懸垂文である。

③文様は隆帯・隆線で施文され、原則縄文を持たない。

このような土器群を「火炎土器」と呼び、各類型の名称は、火焔型土器と王冠型土器の他は代表的な出土遺跡名など、今後の調査・研究の推移をみて決めて行けばよいと考える。

Ⅲ．研究の現状

大きさは、容量は1.5～10ﾘｯﾄﾙ前後で、最少が約0.4ﾘｯﾄﾙ、最大が約25ﾘｯﾄﾙ、平均値が約５ﾘｯﾄﾙである。器高は、最も高いものは火焔型土器で61㎝、王冠型土器で52㎝、最少は火焔型土器で15.5㎝、王冠型土器で13.4㎝である。

施文の手順は横位・縦位の区画を隆帯で行った後、区画内に渦巻文等の施文や、突起の貼付を行っていると考えられる。技法は粘土紐を貼付・整形する隆帯と、器面に半截竹管で下書きした後にヘラ状工具で削り出す隆線で行われたとみる。三条市の吉野屋遺跡からは、施文のために器面全体に下地粘土を上塗りした火焔型土器が出土しており、施文における一つの手がかりとして注目される。

用途は、火炎土器の多くは深鉢で、その内面・外面には炭化物の付着が認められ、外面は火熱をうけて赤く変色しているものが少なくないことから、煮炊きに使用されてことは明らかである。では、いったい何を何時煮炊きしたということの解明は長い間の懸案であったが、理化学分析の進歩によって、ある程度明らかになってきた。それによると、デンプン質食材と動物性食材を組み合わせた調理が想定されるという。何時使用されたかは、特徴的な器形や文様、土器総体でみると主体を占める土器でないことから､日常というよりもマツリなどの「ハレの日」に使用されたという考えがある一方、他の土器と一緒に同じ状況で出土することや煮炊きに使用されていることから、日常的に使用されていた土器という考えもあって意見が分かれるところである。

編年とは、土器の器形や文様、出土した層位や一緒に出土した土器などを手がかりにその土器の時期を相対的に決定する考古学的な手法である。それによると火炎土器の編年的な位置は中期中葉の初めから中頃に求められ、少なくとも新・古の２段階の変遷が考えられる。なお、火炎土器に伴うと考えられていた栃倉式または火炎土器様式Ｂ群とされる土器群は、最近の調査・研究によって伴わない可能性が高いことが明らかとなってきた。一方、理化学的手法によって年代を決定する方法もある。最近では放射性炭素（Ｃ14）の加速器質量分析法（ＡＭＳ）が開発され、さらにそのデータを暦年代に補正する手法（暦年較正）とあいまって高精度化が進んでいる。その手法によると、火炎土器の年代は約5,300年前～約4,800年前の約500年間にほぼ収まる。

分布は、従来は信濃川流域の新潟県を中心に、富山県、長野県、山形県、秋田県の一部に分布するといわれてきた。その基本線は変わらないと考えられるが、最近は阿賀野川北部での出土が目立ちはじめ、今後の成り行きいかんでは主要分布域が北に拡大する可能性もある。信濃川上流域においても主要分布域が長野県に食い込むことがほぼ確実視される。しかし、米山以西の上越地方においては、出土量が極端に減少することから、主要分布域とはいえない状況である。

Ⅳ．火炎土器と一緒に出土する土器

火炎土器の時代、土器は火炎土器だけで構成されているわけではない。野首遺跡が所在する信濃川上流域では、少なくとも以下に示すような異なる顔つきの土器が一緒に出土する。

東北南部起源の土器は、東北地方南部に分布する大木８ａ式･８ｂ式土器の影響を強く受けた土器で、新潟県では塔ヶ崎類型群などと呼ばれている。出土量が火炎土器よりも多く、主体をなす土器群である。火炎土器とは対照的に縄文地文を原則とし、隆帯や沈線でクランク文・横Ｓ字状文・波状文・渦巻文・剣先文などの意匠文を施文する。一方、十日町、津南、南魚沼といった信濃川上流域には、この地域独特の土器群が存在する。それらは、器種はほとんどが深鉢で、文様は地文に縄文を持つものと持たないものの２者からなり、隆帯・隆線・沈線で渦巻文や曲線文など(曲隆線文)を描く。文様構成は、口縁部と胴部の２帯構成や口縁部から胴部までひと続きの１帯構成で、火炎土器のように口頸部と胴部というように大きく２帯構成となることはなく、文様や文様構成の一部に中部高地や北陸の片鱗がみられるが、それらの地域の土器群とは明らかに異なる。この土器群については、周辺地域の特徴を取り入れつつ､当該地域で独自に生成したものと捉え､新たな型式名称（例えば「五丁歩註3式」）などを付けるべきと考える。長岡など信濃川中流域との地域差を考える上で重要な土器群である。

Ⅴ．野首遺跡の土器

野首遺跡からはどのような土器が出土しているのか、主要なものを観ていきたい。

火炎土器を代表する火焔型土器と王冠型土器は多数出土している。火焔型土器は最も古いと考えら

れている古段階の古（1）、古段階の新～新段階（2）、新段階（3・4）に編年できるものがあり、その多くは古段階の新や新段階といった新しい時期の火焔型土器である。王冠型土器は、短冊形突起に抉りを持つものがほとんどでその抉りも明瞭である（5～7）ことから、火焔型土器と同様に新しい時期のものが多いと考えられる。他の類型の火炎土器（8）もバラエティーに富む形で出土している。塔ヶ崎類型群や大木系・式と呼ばれている東北南部起源の土器も定量が出土している。それらは東北地方南部の大木8a式古段階、同新段階（9）、大木8b式古段階（10）に並行し、その中心は大木8b式古段階並行である。信濃川上流域独特の土器である仮称五丁歩式土器（11）も一定量が出土している。しかし、火炎土器直後の土器である栃倉式（12）は、公表されているものは3点しかなく、火炎土器や同時期の土器に比べて極端に少ない。実態はどうなのであろうか？、そして、公表されているものは全て古段階の栃倉式である。新段階の栃倉式は存在するのか？、その数は？、当遺跡での栃倉式の存在は、火炎土器や当遺跡の消長を考える上で重要である。

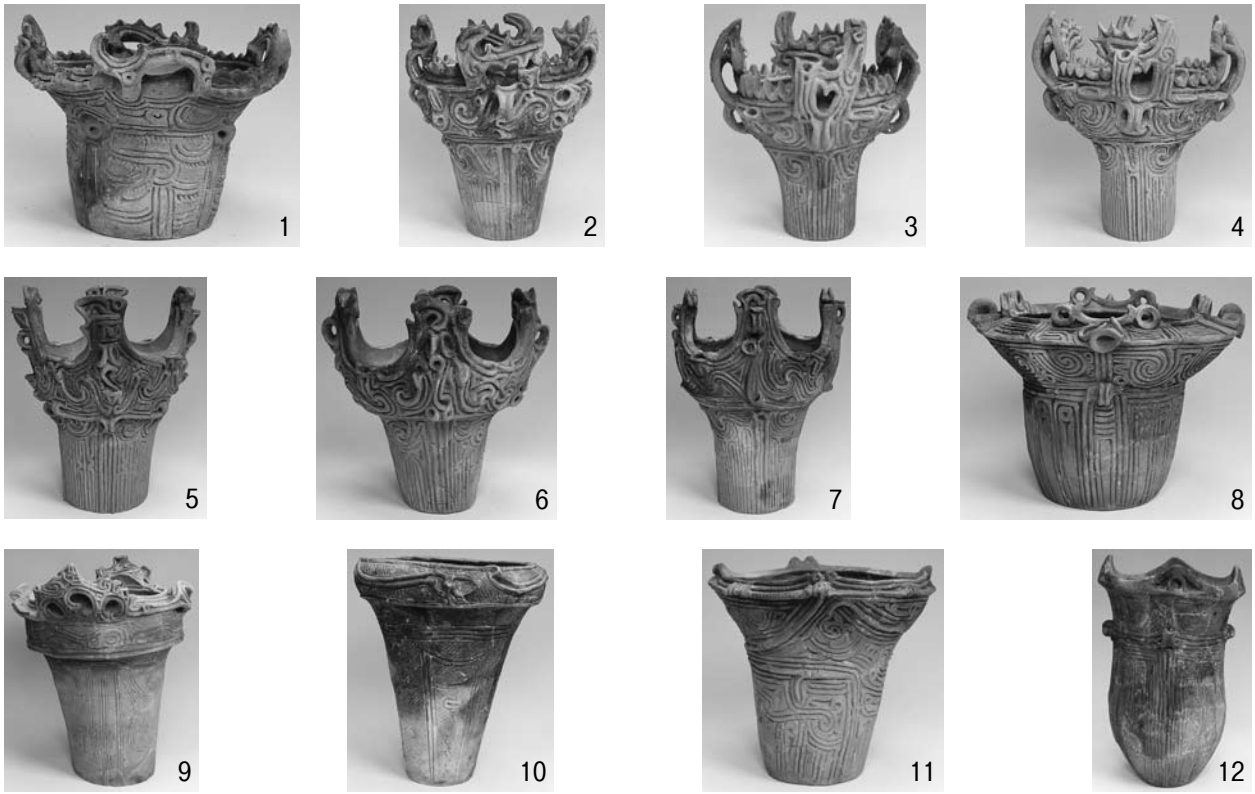
おわりに　―野首遺跡の火炎土器の魅力と今後―

野首遺跡の火炎土器の魅力は、第一に出土量が多いということと、新段階の火炎土器が多いということがあげられる。復原された火炎土器はざっと数えても火焔型土器・王冠型土器を中心に30点余りはあり、このように火炎土器を大量出土する遺跡は中心地域である信濃川上・中流域においてもここだけである。「なぜ多いのか」ということを追求するだけでも充分な研究テーマとなり得、この遺跡でしか研究できないテーマでもある。文様構成、施文、作り方など火炎土器の詳細な研究も可能である。新段階の火炎土器は、古段階に比べて出土が少なく希少価値であると同時に、それが多いということは火炎土器の終焉を追求する上、および栃倉式への移行を探る上での重要な資料となり得る。

註1　火炎土器様式のA群や馬高式の火炎類型群といった土器である。

註2　新潟県立歴史博物館2009 『火焔土器の国 新潟』 ㈱新潟日報事業社

註3　新潟県教育委員会1992 『五丁歩遺跡　十二木遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集　新潟県教育委員会



野首遺跡の土器

館蔵資料報告①

中里地区の釜神様

笠 井 洋 祐（学芸員）

はじめに

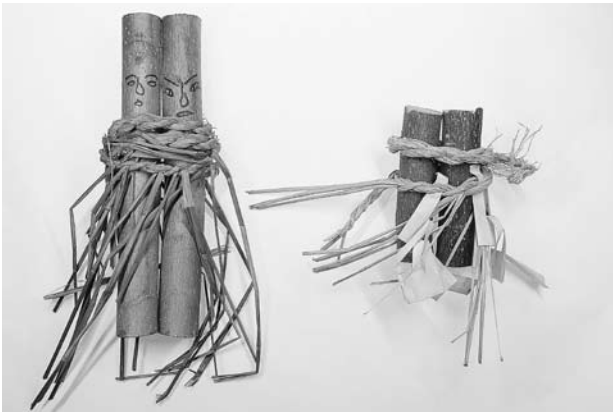
ここで紹介する釜神様（カマガミサマ）は、中里地区から寄贈され中里文化財資料収蔵庫に収蔵されている資料２点である。１月１日から７日（場所によっては５日）までを大正月といい、３日はカマガミサマノトシトリ（釜神様の年取り）の日で、中里地区ではカマガンサマとも呼ぶ。カマガンサマはかまどの近くに祀られている神様で、通常はクルミやミツグサの木で作った１対の御神体が注連縄（シメナワ、シメとも呼ぶ）で結ばれ、３日の晩に新しい御神体を作って取り替えるものである。近年、大正月の行事などが行われる地域が減り、カマガンサマが作られることも少なくなっているのが現状である。このような資料は隣接する津南町で「秋山郷及びその周辺地域の山村生活用具」として昭和51年と平成３年に国指定重要文化財（有形民俗）に指定され、その中には中里地区の程島や白羽毛のカマガンサマも含まれている。今回は重要な民俗資料の１つと考えて収蔵資料の報告を行う。

資料１

資料１の詳細な作成された地域は不明である。長さは向かって右が約25.7㎝、左が25.4㎝、太さが右が3.8㎝、左が3.4㎝で、重量は全体で260ｇである。使用されている木は不明で、切口の観察から１本の木を切って左右に使っていることがわかる。２本を注連縄で結束し、顔を墨書によって具象的に表現している特徴がある。

資料２

資料２は白羽毛地内から寄贈されたものである。長さは右が12.8㎝、左が12.7㎝、太さは右が3.3㎝、左が3.1㎝で、重量は全体で129ｇである。使用されている木はミズキで、資料１同様に１本の木を切り左右に使っている。２本を注連縄で結束し、紙垂（しで）が下げられている。資料１のような具象的な表現は施されていない。



中里地区の釜神様（左：資料１　右：資料２）

おわりに

今回は収蔵資料２点についての報告を行った。カマガンサマの分布は津南町、栄村、十日町市中里地区と松之山地区であり、非常に狭い範囲の限られた地域で行われている大正月の行事と言える。中里地区を見ても、清津川と釜川流域の通り山～土倉、重地～田代では確認されるが、信濃川左岸の貝野では確認されておらず、各地域の歴史文化を考える上で重要な資料といえる。また、カマガンサマの特徴も個体により異なることがわかった。津南町の重要文化財資料には、顔を彫刻して具象的に表現したもの、農具などを小型模型で作成して一緒に結束しているもの、墨書の紙札を一緒に結束しているもの、墨書の紙札のみを御神体としたものなどがあり、大きさや長さもバラバラである。今後は聞き取りなども含め、より詳細な分布や形などを調査する必要があるだろう。今回は簡単な資料報告となってしまったが、本来であれば実測図やより詳細な計測が必要であり、今後の課題としたい。

参考文献

中里村史編さん委員会　1989『中里村史　通史編下巻（近代・現代・民俗）』

館蔵資料報告②

縮　切　本　帳

菅　沼　　亘（学芸員）

縮切本帳は、越後縮の切れ地が貼り付けられた商品見本である。十日町市に残る縮切本帳は、国指定重要文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料2,098点」（昭和61年指定・当館所蔵）中の７冊と十日町市指定文化財「越後縮裂見本帳２冊」（昭和47年指定）の計９冊が現存し、これらのすべてを当館が所蔵している。ここでは、江戸時代の年号が記される２冊について報告する。

まず、市指定文化財に指定されている文化９年(1812)の「縮裂本之帳」（越前屋）は、かつての縮問屋・蕪木家に伝えられ、越後縮に絣文様が普及し始めた頃の貴重な資料である。蕪木家の出自は明らかでないが、『中魚沼郡誌』（大正８年刊行）の「下蕪木氏」の項に、越前国蕪木浜の出身で元和(1615～1624)のころ十日町に移住し、蕪木を姓として屋号を越前屋と称したとある。十日町の縮問屋は、寛保３年(1743)に８軒あり、越前屋はその中で最も古い問屋である。なお、越前屋４代目・杢兵衛の次男・重兵衛は、享保19年(1734)に分家して問屋を創設し、加賀屋を屋号としている。その後、加賀屋は明治23年(1890)に縮問屋を廃業した。

「縮裂本之帳」（文化９年）

この縮裂本之帳には、220片余りの切れ地が貼られている。模様は縞・格子と絣でほぼ二分されているが、前者がやや多く、中には絣と縞を組み合わせたものも見られる。絣の中には白地の経絣・経緯絣もあるが、紅葉、花、笹、鳥、流水など緯絣による絵絣もあり、越後縮の絣模様が発達する様子がわかる。地色は藍染めの紺系統が主流で、白地は全体の四分の一弱である。

次に、重文に指定されている文久２年(1862)の「縮切本」（山本庄左衛門）には、約320片の切れ地が貼られている。縞・格子は全体の四分の一ほどと少なく、銀杏の葉、松葉、花、鳥、とんぼ、蜘蛛の巣と蜘蛛、茶道具など多様な絵絣が見られる。この切本帳は、縮から絹織物へ十日町の織物生産が転換を始めた幕末の資料として貴重である。

「縮切本」（文久２年）

＊本稿は、『四大麻布　越後縮・奈良晒・高宮布・越中布の糸と織』（十日町市博物館・近世麻布研究所2012年）に収録のコラム②「縮切本帳」を一部改編して再録した。

参考文献

佐野良吉 2003「縮問屋加賀屋の御用縮及び関連資料110点」『妻有郷の文化財』週報とおかまち社
佐野良吉 2003「越後縮・裂見本帳２冊」『妻有郷の文化財』週報とおかまち社
山﨑光子 1997「第一編・第三章 越後縮の意匠とその変遷」『十日町市史』通史編６・織物
丸山克巳 1997「第一編・第二章 越後縮の生産と流通」『十日町市史』通史編6・織物
丸山克巳 2009「序章 越後縮の誕生と縮問屋」『縮問屋 加賀屋の世界』十日町情報館

Ⅳ　博物館友の会

博物館友の会は、博物館開館に先立って昭和54年に発足し、会員は713名（平成29年２月現在）である。現在、植物・古文書・いしぶみ・歴史・方言・考古・近代史（世界遺産を学ぶ会）・きもの・民俗の９つの研究グループが、独自の研究活動を行っている。今年度の友の会の主な活動は以下のとおりである。（黒田 朋美）

４月９日（土）　平成28年度総会（会場：博物館集会室）
記念講演会「上杉謙信の関東遠征」
講師：花ヶ前盛明氏（上越市・越後一の宮居多神社宮司）
５月14日（土）　火焔125号発行
６月８日（水）　第82回文化財めぐり
“大河ドラマの舞台～信州上田を巡る旅～”
参加費7,000円・参加者34名
７月２日（土）　庚申供養祭（会場：郷土植物園）
９月３日（土）　火焔126号発行
10月12日（水）　第83回文化財めぐり
“長岡秋のバラ園と摂田屋蔵巡り
～県立歴史博物館・国営越後丘陵公園・醸造の町摂田屋～”
参加費6,500円・参加者26名
２月４日（土）　火焔127号発行
２月18日（土）・19日（日）　第68回十日町雪まつり　はくぶつかんひろば開設
（伊乎乃庵、売店、縄文クッキー・甘酒のサービス、すべり台、雪像、西小学校児童の物品販売など）
ひろば来場者　18日 1,800名・19日 450名
３月11日（土）　研究グループ発表会（会場：博物館集会室）

植　　物	（高橋勝芳）	当間山麓のタマガワホトトギス
民　　俗	（高橋由美子）	加賀屋・蕪木家の屏風包紙資料の光学調査について
近 代 史	（太田　玄）	明治日本の産業革命遺産について
方　　言	（舩坂テル子）	十日町方言で語る昔話
いしぶみ	（林　悦郎）	中山道・八幡宿付近のいしぶみ
古 文 書	（鈴木　茂）	越能山都登
考　　古	（菅沼　亘）	考古資料から見た土器づくり
歴　　史	（星名　寔）	北越雪譜 二編巻一 古哥ある旧蹟を訪ねて

平成28年度 総会

第83回 文化財めぐり

第68回 雪まつり

附編　これまでに開催された企画展・特別展（移動展・巡回展含む）

年　度	特別展・企画展等の名称　（期間）
昭和54	「越後のちぢみ展」（4/27～5/20）、「木の文化展」（8/4～31）、「星襄一遺作展」（10/12～14）、「菊と刀展」（10/27～11/4）、「雪の民具展」（2/7～29）
昭和55	「明石ちぢみ展」（5/1～6/8）、「新潟県の画家たち展」（8/9～17）、「庚申さまと庚申信仰展」（10/26～11/9）、「雪と雪の民具展」（2/13～22）
昭和56	「越後ちぢみと明石ちぢみ展」（5/3～6/7）、「日本の郷土玩具展」（11/1～8）
昭和57	「妻有の画人たち展」（8/25～29）、「妻有の文化財展」（10/30～11/7）
昭和58	「妻有の衣食住展」（8/10～31）、「近代日本洋画の巨匠たち展」（11/1～6）
昭和59	「日本画、洋画、巨匠たちの世界展」（9/1～5）、「明治、大正、昭和100枚の写真展」（10/20～11/4）、「目で見る十日町の歴史展」（11/11・中条公民館新座分館、2/8～17・下条公民館）
昭和60	「広重・東海道五十三次展」（9/1～5）、「全日写連写真展」（10/3～6）、「戦中・戦後のくらし展」（11/22～12/8）、「雪の造形写真展」（11/3・中条公民館大井田分館）
昭和61	「重文・越後縮資料展」（4/10～7/20）、「世界の大昆虫展」（8/26～9/7）、「女性をえがく展」（10/8～12）、「明治・大正・昭和写真展」（11/2～3・水沢公民館）
昭和62	「大正浪漫明石ちぢみの世界展」（4/9～5/17）、「信濃川の魚と漁法展」（8/23～27）、「妻有の画人たち展Ⅱ」（10/17～25）、「雪の中のくらし写真展」（2/12～14）、「小坂遺跡と縄文人のくらし」（10/25・吉田公民館鐙島分館他）
昭和63	「冬の生活用具展」（4/30～5/29）、「デザイン亀倉雄策展」（8/21～28）、「市史編さん資料展」（10/8～16）、「越後縮名品展」（2/10～12）、「昔のくらし写真展」（10/23・吉田公民館名ヶ山分館）、「水沢地区の城と館と遺跡展」（11/3～6・水沢公民館他）
平成元	博物館開館・友の会設立10周年記念「池田満寿夫展」（10/21～29）、「妻有の百三十三番写真展」（11/5～12・水沢公民館他）
平成２	「妻有の職人と道具展」（4/28～5/20）、「近世妻有俳諧と系譜展」（8/11～9/2）、「雪の造形と文様展」（10/13～21）、「幅上遺跡速報展」（11/3・吉田公民館鐙島分館）
平成３	「十日町の積雪期用具展」（8/11～9/1、2/8～16）、「大新田遺跡の調査記録」（10/27・鐙島小学校）
平成４	「積雪期用具展」（4/25～5/31）、「竹久夢二展」（10/10～26）
平成５	「星襄一とスノリア展」（6/5～20）、「浮世絵名品展―中右コレクション」（10/9～25）、「カウカ平Ａ・Ｂ遺跡・高島南原Ａ・Ｂ遺跡調査記録」（10/31・鐙島小学校）
平成６	市制施行40周年記念「棟方志功展」（10/8～23）、「高橋喜平・雪の造形写真展」（2/16～20）、「中道・思川遺跡の調査」（10/30・真田小学校他）
平成７	「手工芸の美―編・組・刺繍三人展」（6/17～7/2）、「富士の写真家・岡田紅陽生誕100年記念展」（10/7～22）、「上梨子Ａ・Ｂ遺跡調査」（11/5・西小学校）
平成８	「遺跡発掘速報展―平成３～７年度分」（6/15～30）、「縄文の美―火焔土器の系譜」（9/28～10/27）
平成９	「十日町の文化財展」（5/17～6/8）、「中条地区の遺跡調査」（10/25～26・中条小学校）
平成10	「インド先住民族アート展」（ミティラー美術館共催・4/17～5/5）、「妻有のいしぶみ」（10/6～11/15）、第50回雪まつり記念「高橋喜平写真展―雪花譜」（2/19～21）
平成11	笹山遺跡出土品国宝指定記念「縄文の美パートⅡ―火焔型土器の世界」（8/21～10/10）
平成12	「縄文の祭祀」（9/22～10/22）、「くらしの美　思い出の品々」（2/16～18）、「笹山遺跡とその出土品展」（6/3～4）
平成13	「民具からみた縄文の用具―編・織用具と装身具―」（6/2～24）、「民具からみた縄文の用具２―食料調達と食事の用具―」（9/22～10/14）、「博物館収蔵資料展―越後縮を中心として―」（2/15～17）、「野首遺跡展」（11/4・下条公民館上新田分館）
平成14	「現代アートに挑戦するインド民族アートの世界」（ミティラー美術館共催・4/26～5/19）、「きものでつづる十日町の歩み」（6/15～30）、雪文化三館提携10周年記念「北越雪譜と魚沼の風土」（10/26～11/10）、「博物館収蔵資料展―十日町のきものから―」（2/14～16）
平成15	全国大井田氏サミット10周年記念「大井田健一　父祖の地を描く」（5/17～6/8）、大地の芸術祭協賛「大地の息吹き―十日町の火焔型土器―」（7/20～9/7）、きもの歴史館開館記念「越後縮の文様と美」（10/4～28）、「収蔵資料展―暮らしを彩る着物と品々―」（2/20～22）、
平成16	国宝指定５周年記念「国宝と地域の宝物―十日町の火焔型土器Ⅱ―」（6/1～30）、「博物館と友の会の四半世紀」（7/10～25）、市制施行50周年記念「十日町市50年の歩みと暮らし」（9/29～11/3）、火焔街道博学連携プロジェクト「子ども縄文研究展」（11/21～12/25）
平成17	「女性の着物と装い―髪飾り・櫛と簪と笄と―」（6/11～7/3）、「博物館収蔵資料展―生活用具を中心に―」（8/9～21）、「カストリ雑誌・戦後出版文化の一断面―西潟浩平コレクション―」（8/9～21）、「新・十日町市の宝物―地域に息づく文化財―」（10/8～11/6）、「子ども縄文研究展」（11/20～12/4）
平成18	「越後の布―暮らしの中の着物―」（7/22～9/10）、「梵字・曼荼羅展」（10/7～22）、「子ども縄文研究展」（11/23～12/6）、「博物館収蔵資料展―きものと資料と孔版画―」（2/16～18）
平成19	「十日町のやきもの―縄文時代草創期、火焔型土器、そして妻有焼へ―」（8/25～9/24）、「残された雪国の記憶―雪国の暮らしを写す―」（10/6～11/4）、「出土品が語る新潟の歴史」（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団共催・11/10～12/9）、「子ども縄文研究展」（12/22～1/14）、「博物館収蔵資料展―軸物を中心に―」（2/16～18）
平成20	「十日町市の中世遺跡―発掘された集落・居館―」（8/12～9/15）、「岡田紅陽富士写真展」（10/11～26）、「博物館に寄託・寄贈された考古資料」（11/8～24）、「子ども縄文研究展」（12/20～1/12）、「博物館収蔵資料展―着物を中心に―」（2/20～22）、雪文化三館提携事業「雪と人が織りなす文化」（9/13～15・長岡市中央図書館）
平成21	博物館開館・友の会設立３０周年記念「縄文人の道具箱　野首遺跡展」（8/1～9/13）
平成22	「壊されるモノ―土偶・石棒・石皿からみた縄文の祭祀―」（7/31～9/5）、「信濃川上・中流域の縄文時代草創期遺跡」（11/2～28）
平成23	「縄文のKAZARI―顔を飾る縄文人―」（7/30～9/11）、「十日町市内遺跡発掘調査速報展」（11/26～3/25）
平成24	「四大麻布―越後縮・奈良晒・高宮布・越中布の糸と織り―」（7/21～8/19）、「異形の縄文土器」（9/22～11/4）、「昭和の残映―博物館に寄贈された昔の資料―」（2/2～3/3）、「縄文の華　十日町市の国宝・火焔型土器展」（8/3～9/30・星と森の詩美術館）
平成25	「箱の中の虫―昆虫博士・樋熊清治氏標本コレクション―」（7/20～8/25）、「ビジュアル縄文博物館―縄文人の衣食住、そして土器―」（9/21～11/10）、「子ども縄文研究展2013」（1/18～2/16）
平成26	博物館開館・友の会設立35周年記念「松代の石仏―里山の祈りと信仰―」（7/19～8/24）、「縄文前期のムラ　赤羽根遺跡―火焔型土器の出現前夜―」（9/27～11/9）、「子ども縄文研究展2014」（1/17～2/15）
平成27	「カストリ雑誌とその時代―西潟浩平氏コレクション―」（7/25～8/30）、「縄文後期の墓　栗ノ木田遺跡―縄文人の死と弔い―」（10/3～11/8）、「子ども縄文研究展2015」（1/16～2/21）
平成28	「館蔵資料展　市民からの贈り物」（7/30～8/28）、「土器づくりの考古学」（10/1～11/6）、「子ども縄文研究展2016」（1/14～2/19）

明石ちぢみ展（昭和55）

日本の郷土玩具展（昭和56）

妻有の文化財展（昭和57）

妻有の衣食住展（昭和58）

戦中・戦後のくらし展（昭和60）

重文・越後縮資料展（昭和61）

池田満寿夫展（平成元）

妻有の職人と道具展（平成２）

星襄一とスノリア展（平成５）

岡田紅陽生誕100年記念展（平成７）

縄文の美・火焔土器の系譜（平成８）

妻有のいしぶみ（平成10）

北越雪譜と魚沼の風土（平成14）

大井田健一・父祖の地を描く（平成15）

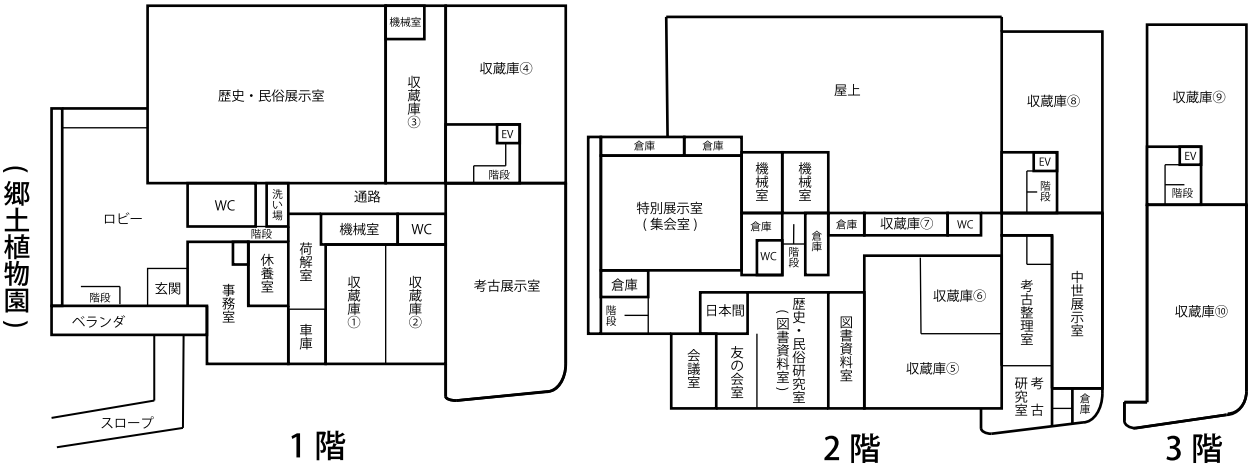
新・十日町市の宝物（平成17）

梵字・曼荼羅展（平成18）

野首遺跡展（平成21）

ビジュアル縄文博物館（平成25）

施設概要



（遺跡ひろば）

＜建物の床面積＞

1 階	1,855 ㎡
2 階	1,439 ㎡
3 階	458 ㎡
その他	56 ㎡
合計	3,808 ㎡

＜屋内施設＞

歴史・民俗展示室	476 ㎡	収蔵庫①	79 ㎡	収蔵庫⑥	69 ㎡	事務室・休養室	123 ㎡
考古展示室	278 ㎡	収蔵庫②	79 ㎡	収蔵庫⑦	23 ㎡	歴史・民俗研究室・資料室	143 ㎡
中世展示室	115 ㎡	収蔵庫③	104 ㎡	収蔵庫⑧	164 ㎡	考古研究室・整理室	115 ㎡
特別展示室（集会室）	181 ㎡	収蔵庫④	191 ㎡	収蔵庫⑨	164 ㎡	会議室・日本間・友の会室	94 ㎡
展示室　計	1,050 ㎡	収蔵庫⑤	160 ㎡	収蔵庫⑩	247 ㎡	その他	1,003 ㎡
				収蔵庫　計	1,280 ㎡	共用部　計	1,478 ㎡

＜屋外施設＞

郷土植物園　3,010 ㎡　　遺跡ひろば　3,008 ㎡

博物館の外観

遺跡ひろば（昭和 63 年開園）

郷土植物園（昭和 61 年開園）

〈平成28年度　博物館職員〉

館　長	佐 野 誠 市	嘱 託 職 員	佐 野 芳 隆
副館長	石 原 正 敏(学芸員)	〃	宮 内 信 雄(調査研究員)
主　査	菅 沼　亘(学芸員)	事務支援員	中山 未沙樹
〃	村 山　歩	臨 時 職 員	角 山 誠 一
〃	笠 井 洋 祐(学芸員)	〃	瀧沢 亜矢羽
〃	南 雲 勝 巳	〃	田 村　薫
〃	大 滝 孝 子	〃	引 間 佳 子
〃	阿 部　敬（学芸員）	〃	高 橋 真 弓
主　任	黒 田 朋 美		
主　事	田 村 典 子		

十日町市博物館 年報 第３号

編集・発行：十日町市博物館

〒948-0072 新潟県十日町市西本町1-382-1　TEL:025-757-5531 ／ FAX:025-757-6998

URL: http://www.tokamachi-museum.jp ／ e-mail: museum.10@city.tokamachi.lg.jp

発行日：平成29年(2017) 3 月31日　　印　刷：株式会社 滝沢印刷